

【七夕百合物語】

2022 エトワール



トラック1「3年ぶりだね！」

アルタイル

「……ベガ！ ベガ～～！！！」

ベガ

「きゃっ！

もう……アルったら、相変わらずなんだから」

アルタイル

「えへへ、ごめんね。

でもさ、3年も会えなかったんだよ？」

ベガ

「……そうですね。

ただでさえ、年に一度しか会えないというのに……」

アルタイル

「そうそう。ここ数年、七夕の日は天気が悪かったからさ。

……わ。この部屋も埃たまってる」

ベガ

「誰かさんがはしゃいだら、大変なことになってしまいますね」

アルタイル

「え～？ 誰かさんってだれだれ？」

ベガ

「もう……本当、可愛いんだから」

アルタイル

「ふふふ、なんか言った？」

ベガ

「な、なんでもありません。

……それよりも、話したいことがあるの」

アルタイル

「え？

……あ、分かった。掃除の分担でしょ」

ベガ

「……おバカ。

そんなことより、もっと大事な話です」

ベガ

「あなたとの関係を、大きく変えてしまうような……

そんな、とても大事なお話」

アルタイル

「……あっ！

ま、待った、ストップストップっ」

ベガ

「え？」

アルタイル

「そこから先は、言わないでっ

ボクからも、言いたいことがあるのっ」

ベガ

「……っ」

アルタイル

「え、えっと……あの、その……！

この3年、会えない時間がずっと続いて……それで改めて思ったんだけど……」

アルタイル

「……うわー、やっぱり、改めて言うの恥ずかしいな……

で、でも、今日こそ勇気を出して言うよっ！」

アルタイル

「キミが好きだ、ベガ！ ボクと一緒にってほしい」

ベガ

「……ふふ。

先に言われてしまいましたね」

アルタイル

「えへへ、どうしてもベガより先に言いたくて」

ベガ

「わたしも……あなたに負けないくらい、

あなたが好き」

アルタイル

「えー？ ボクのほうが大好きな自信、あるけどなっ」

ベガ

「ふふ、そうかしら？」

ベガ

「……ちゅ」

アルタイル

「……ひゃっ！
キ、キ……キス、されちゃった……！」

ベガ
「こんなものじゃありませんよ。
3年間、ずっとガマンしてたんだから」

(同時)
ベガ
「ちゅ……ん、ちゅう……」
アルタイル
「んう……ちゅ……う……」

ベガ
「どう？ 伝わったかしら」

アルタイル
「はあ……はあ……もう、すごく伝わったけど……
うう～……！ ボクだって負けないぞっ」

ベガ
「ひゃっ……
あなた、力……強いよね……」

アルタイル
「えへへ、絶対離さないっ」

アルタイル
「ずっと……こうして、ベガの身体……ぎゅーって抱きしめたかったんだもん。
やっと独り占めできた……ふふ……」

アルタイル
「……ちょっと、エッチな体つきになった？」

ベガ
「こ、こら……！」

アルタイル
「ごめん、言い方悪かったねっ。
おっぱい……前より大きくなった気がして。やわらかい」

ベガ
「もう……エッチなのはどちらですか。
……その、可愛く見られる努力はしてるつもりですけど」

アルタイル
「えへ……えへへ、そっか……」

アルタイル

「ねえベガっ、舌、あーんって出してみて？」

ベガ

「へ？ い、今ですか？」

アルタイル

「いいからいいからっ」

ベガ

「もう……むう……」

ベガ

「べー……こうれふ、か？」

アルタイル

「うんうん、そのままそのまま……」

アルタイル

「はむ……ん、ちゅう……ちゆる……れろ……」

ベガ

「んう……うつ……あ……そんな、舌、しゃぶるなんへ……んんっ」

アルタイル

「ちゆる……ちゅぱ……はむ、れろ、れろお……」

ベガ

「ん……ふっ、う……んあっ……ふ、うう……」

アルタイル

「ちゅうう……んちゅ……ぷは……
えへへ、どう？ さっきの倍返しっ」

ベガ

「んう……あなたばかり、ズルいです……
わたしにも……させてください……」

アルタイル

「もちろんだよっ
今度は、一緒に……」

ベガ

「はむ……ちゅうう……んちゅ、ちゆるる……」

アルタイル

「んうつ……ちゅっ……ちゅうう……舌、からめるの……」

すっごいきもひいね……ちゅう……ちゅぱ、んちゅう……」

ベガ

「ちゅう……ちゅぱ……ええ、ほんとう……あたまのおくが……
しびれて……んんっ、ちゅう……ちゅぱ……んっ……」

アルタイル

「ぷは……ねえ……次はベガの唾液、ちょうだい……
キミの全部、ほしいよ……」

ベガ

「あ……え……少し……その、はしたなくありませんか……？」

アルタイル

「そんなことないよっ。
好き同士なら、普通だよ……」

ベガ

「……そうですね、ごめんなさい。
少し……照れちゃいました」

ベガ

「いきますよ……ん、ちゅ……べー……」

アルタイル

「ん……う……ちゆる……こく……こく……んんっ。
ベガの、おいしいよ……」

アルタイル

「今度は……ボクのも、お返しするね……」

アルタイル

「はむ……ちゅ……べー……べー……」

ベガ

「んう……ん……こく……こく……ふ、んんっ……」

アルタイル

「ぷはっ……はあ……はあ……
わ、唾液が糸引いて……なんか、エロいね……」

ベガ

「はあ……はあ……夢、みたいです……
あなたと、こんな風に……唇を重ねてるなんて……」

アルタイル

「もっと早く、こうしてればよかったね」

ベガ

「ええ……正直、その……」

アルタイル

「分かるよ。すっごくすっごく、気持ちいい」

ベガ

「ずっと、したいたいです……」

アルタイル

「ねえ……このあと、どうする？」

アルタイル

「いつもなら、真っ先にお部屋のお掃除して……
一緒にご飯食べたり、遊んだり、してたけど……」

ベガ

「無理、ですよ」

アルタイル

「うん、無理」

ベガ

「ベッド……行きましょうか」

アルタイル

「うん……」

ベガ

「えへへ」

アルタイル

「ふふ」

アルタイル

「いっぱい、愛し合お？」

ベガ

「たくさん、愛し合いましょう？」

トラック2「熱い想いを君に・・・」

アルタイル

「.....わ、この部屋も久しぶりだねっ」

ベガ

「.....毎年、一緒にベッドに入って、
夜更けまでお話するのが、ひそかな楽しみでした」

アルタイル

「ボクもボクもっ」

アルタイル

「.....でもさ、お互いよく我慢できたよね」

ベガ

「.....あの、今だから言えるんですけど。
寝息を立ててる時に何度か.....キス、してしまいました」

アルタイル

「え！？ ボクもだよっ！？」

ベガ

「え.....！？ ぷ.....ふ、ふふ.....ふふふふ.....」

アルタイル

「あはははっ、それでお互い、
あんまり初めて一とか驚かなかったんだっ」

ベガ

「似た者同士というか.....考えることは同じみたいですわね」

アルタイル

「じゃあこれも分かるよね.....えいつ」

ベガ

「きゃっ、いきなり押し倒さないでください.....」

アルタイル

「でもでも、早くしたいよねっ？」

ベガ

「.....ふふ、せっかちさんなんだから」

アルタイル

「今まで我慢してた分の埋め合わせしないとだもんっ」

ベガ
「ええ、ですね」

アルタイル
「お耳、なめてもいいかなっ」

ベガ
「へ！？ ほ、ほんとに
どこでそういうの覚えてきたんですか……」

アルタイル
「えへへー、内緒」

アルタイル
「それに……前から、
すごいキレイだなーって思ってたんだよねっ」

ベガ
「褒めれば何してもいいと思ってません？」

アルタイル
「え、えへへ……バレた？」

ベガ
「ふふ……いいですよ」

アルタイル
「やった……じゃあ……左耳、貸して……？」

アルタイル
「ん……ちゅ……れろ……んちゅう……んちゅう……んちゅう……ちゅう……」

ベガ
「ん……う……は、あ……くすぐ、つたいです……」

アルタイル
「んちゅ、んちゅう、んちゅう、ちゅう、ちゅう、ちゅうう……は、あ…」

ベガ
「ひあ……あ……もうちょっと、手加減を……んんんっ」

アルタイル
「ん……んちゅう……んちゅう、ちゅう、ちゅう、
んちゅう、れろ、ちゅう、んちゅう……」

ベガ
「あ……ま、待って……本当に、これ……へ、へんですっ……お耳の中……あなたの舌が這いず
り回って……う……あっ、んんっ……」

アルタイル

「ぷは……えへへ、ベガ、すごい可愛い。
もっと頑張っちゃお」

アルタイル

「んちゆるる、んちゆる、んちゆる、ちゅう、ちゅう、れろ、んちゅう、んちゅう」

ベガ

「ふう……んっ、ふうっ、ふうー……っ！！」

アルタイル

「声……ガマンしないでいいよっ……ちゅう、んちゅう、んちゅう、んちゆる、
んちゆる、んちゆる、んちゆる、れろ、れろ、れろ、れろ……」

ベガ

「そんなこと、言われても……ふ……う……あぁっ」

アルタイル

「ぷは……
わ、ベガの耳、ペトペトになっちゃった……拭くものあるかな」

ベガ

「はぁ……はぁ……ちょ、ちょっとな……
やり逃げは……反則だと、思いますけど？」

アルタイル

「あ……えっと、あはは……きやつ」

ベガ

「お返しに……あなたの右耳、徹底的にイジめてあげます」

ベガ

「んちゅう、んちゅう、れろ、ちゅぷぷっ、んちゆるっ、ちゅぷっ、ちゆるっ、ちゆるっ」

アルタイル

「うひゃっ……あ……う……はぁっ……いきなり、本気だねっ……ふ、んんっ」

ベガ

「ちゆるっ、んちゆるっ、んちゆるっ、んちゆるっ、れろ、れろ、れろお……」

アルタイル

「えへへ……ベガが、ボクのために、エッチなことしてくれてる……
うれしいよお……はぁあっ……あっ」

ベガ

「ぷは……もう、これじゃお返しにならないじゃないですか……
はむ……ちゅうう……るる……ちゅぱ……じゆる…っ、んちゆるっ……」

アルタイル

「だって、気持ちいいんだもんっ……んんんっ、んっ……
もっと……もっとして、いいよっ……」

ベガ

「なら……こうしちゃいます。ふー……ふー……」

アルタイル

「あうんっ……あ、は……ふーふー、だめえ……」

ベガ

「それから……うなじに……ん……ちゅ、ちゅううう……」

アルタイル

「んっ、んんんんっ……」

ベガ

「ふふ……キスマーク、つけちゃいました」

アルタイル

「あ……ズルいズルい、ボクもっ」

アルタイル

「ん……ちゅ……ちゅううう……」

ベガ

「は……あ……んんっ……」

アルタイル

「帰ったら……皆、ビックリしちゃうかな」

ベガ

「今はそんなこと、考えなくていいですよ……」

アルタイル

「うん……ボク、ベガにもっと触ってたい……」

ベガ

「はあ……あっ、いきなり……胸、ですか……んんっ、
触り方、ねちっこいですね……」

アルタイル

「だって……エロいんだもんっ」

ベガ

「なら……こちらですわ」

アルタイル

「ひゃんっ……あ……はああ……」

ベガ

「あ……んんっ……う……そこ、だめ……
敏感……だから……んんっ……ふ、んう……」

アルタイル

「はあ……はあ……えへへ、乳首……見つけちゃった……
布越しでも……硬くなってるの、分かるよ……」

ベガ

「はああ……あ、んんっ……ねえ、待って……」

アルタイル

「ご、ごめん……やりすぎたかい……？」

ベガ

「ち、ちがうの……触るなら……
ちよくせつ……じゃないと……切なくて……」

アルタイル

「……っ！」

ベガ

「ひゃっ……破かなくても……」

アルタイル

「ちょっと今、そういう冷静な判断、無理かも……」

ベガ

「はうっ……あ……んんんっ……や、つまんだりしたら……伸びちゃう……」

アルタイル

「ごめんね、でもベガも悪いよっ。
すっごいすっごい……えっちだから……」

ベガ

「あ……うっ……ふ……あっ……
嬉しいこと、言わないで……何も、考えられなくなっちゃいます……」

アルタイル

「ボクもだよ……ベガの全部に触れていたい……」

ベガ

「ふあ……！ あ……やっ、あ、あそこ……だ、だめです……」

アルタイル

「なんで？ 好き同士なら、触りあうものだよ？」

ベガ

「だって……今、その、濡れてますし……」

アルタイル

「大丈夫だよ……ほら、ボクのも触って」

ベガ

「あ……下着越しでも、分かります……

アルも……興奮してくれてたんですね？」

アルタイル

「ね……動かして、いいよね？」

ベガ

「あ……はあんっ、まだ……いいって……言ってますんよお……」

アルタイル

「んう……でも、ベガも指、動いてる……ふう、んっ……」

ベガ

「でも……あなたみたいに、入り口、なぞったりして……あ……う……

焦らすようなことは……はあっ……あ……んんっ…」

アルタイル

「ベガの、可愛い顔、見たくなっちゃって……ふう、んんっ……

それに、ほら……くちゅくちゅって、音、聞こえてるよ」

ベガ

「はうう……う、それ、はあ……

アルが……だから……独りじゃ、こんなになりませんよ……」

アルタイル

「はあ……あ、ベガも、そういうの……あるんだっ……」

ベガ

「そう、ですうっ……好きな人に……おまんこ、触られるの……

気持ちよくて、きゅんきゅん……しちゃいますうっ……」

アルタイル

「なら、さ……触ってほしいとこ……

ボクのおまんこに、教えて……？ そしたら、そこ、触るから……」

ベガ

「もう、変なことばかり思いつくんだから……ふう、んんっ……」

アルタイル

「ほら、さっきからボクに腰、押し付けてきてる……
つらいんだよね……？ 正直になっちゃお……？」

ベガ

「うう……わかり、ました……わ、わたしは……
入口のどこ、より……先端の……おまめのところを……こんな、風に……んっ」

アルタイル

「あうっ……ベガも、クリ……好きなんだ……
触り方、優しいけど……えっちい……じゃあ、いっぱい触るね……」

ベガ

「はああ……あ、あんっ……んんっ……悪い、ですかあ……
……会えないときは……いつも、こんな風に……お豆を、触りながら……」

ベガ

「あなたに……シてもらう、想像をしてるんですうっ……
はああ……あ、あうっ……んんっ……」

アルタイル

「嬉しい……ボクも、だよ……ほんとに、夢みたい……
ベガが……ボクの指で……可愛く鳴いてる……これ、全部ボクのものなんだね……」

ベガ

「そう、ですよおっ……あなたの指も、おまんこ、興奮して、赤く染まった……
かわいらしいお顔も、全部……わたしのものなんですっ……」

アルタイル

「はああ……ボク、もうガマンできないかも……」

ベガ

「あ……や、下着、ずらしちゃ——」

ベガ

「ふう、んんんっ……あぁっ、そんな、お口つけたら……
汚い、ですよおっ……ふうう、んんっ……」

アルタイル

「ベガに汚いとこなんて、ないよ……それに、つるつるで……
薄ピンクで、すっごいキレイ……はむ、ちゅ……じゅうう……」

ベガ

「あはぁあっ、ん……う、あ……すご、い……舌が……
別の生き物みたいに、うねって……は……あぁ、んんっ……」

ベガ

「負けて、られませんね……わたし、だって……
アルの身体なら……どんなところも……愛せる自信が、ありますから……」

ベガ

「んじゅ……ちゅ……じゅうう……」

アルタイル

「うひゃっ、あっ……わ、お汁、すっちゃダメだよおっ……ふう、んっ、
ボクが、攻めてるのに……んんんっ、あ……んうう……」

ベガ

「ダメ、ですうっ……ずっと、一緒って、大好きって誓ったんですから……
気持ちよくなるのも、一緒ですわ……」

アルタイル

「はあぁっ、あっ……んっ、う、嬉しいよおっ……
ベガはもっと……恥ずかしがって、してくれないと思ってたっ……」

ベガ

「あなただから、するんですっ……本当は恥ずかしいけど……
それ以上に、大好きで、大好きだから……」

ベガ

「ちゅうう……んちゅ、ちゅううう……れろ、れろ……」

アルタイル

「うあ、あぁっ……クリの皮、剥けちゃうよっ……ひぁっ、
あ……直接、舐められるの……ヤバい、かも……う、あぁぁっ……」

アルタイル

「はむ……んじゅ……じゅうう……れろ、れろお……」

ベガ

「きやうっ……あ、舌が……あそこ……おまんこの、なかに……
ひうっ、あ、あ……えっちな音、たくさん、しちゃって……はぁっ……」

アルタイル

「おいひいよお……ベガの、おまんこ……
ずっと……なめてたい……あううっ、あ、だめ……でも、なんか……」

ベガ

「わた、しも……さっきから……腰が、ふるえて……
はぁあ……キて、しまいそうですっ……ん、ううっ……」

アルタイル

「いっしょに……いっしょに、イこっ？
はむ、んじゅう……じゅるるっ……んじゅ、じゅううっ……」

ベガ

「はい……おまんこ……ペロペロ、しあいながら……
イ、イきますうっ……アルと、いっしょにいつ……んじゅ、じゅうう……」

アルタイル

「ん、ふ、うう……
いく……いふ……いつひやう……んんっ……ちゅぱ、じゅうう……」

アルタイル

「じゅっ、じゅっ、んじゅるる……じゅるっ、じゅううるるっ、はあ……」

ベガ

「わらひも……も、もう……ふ、んんっ……
んちゅ、ちゅううう……ちゅるるる……」

ベガ

「ちゅっ、んちゅ……ちゅう、ちゅっ、ちゅう……ちゅるる…ゆいううう……」

アルタイル

「あ……ああつ、あああああ……！！」

ベガ

「ん……んんっ、はうううう……！！」

アルタイル

「はあああ……はあ……はあ……ふ、んっ……」

ベガ

「あ……ああ……はあ……はあ……」

アルタイル

「……イかされ、ちゃった……」

ベガ

「わたしも……
こんな……気持ちいいの、初めてです……」

アルタイル

「なんか……一気に、踏み越えちゃったね」

ベガ

「あなたとなら……どこまで行ってもいいって、思ってたから」

アルタイル

「……えへへ、そっか。なら安心だ」

ベガ

「……またエッチな事考えてます？」

アルタイル

「あれ？　なんでわかったの？」

ベガ

「何年の付き合いだと思ってるんですか」

アルタイル

「恋人としては……まだ一日も経ってないね」

ベガ

「こいび……ん……はう……

改めて言われると、照れますね……」

アルタイル

「彼女で、恋人で……ボクのお嫁さんで……
宇宙一大好きな人だよっ」

ベガ

「……っ！

わたしも、ですけど……」

ベガ

「そういうとこ、ズルいです……」

ベガ

「……そ、そうだ。お風呂。入っちゃいましょう？
汗、かきましたし……ね？」

アルタイル

「えへへへ。は～いつ」

トラック3「もう離れたくないから……」

アルタイル

「よーっし、いっちばん風呂はいただきちゃうよっ！」

ベガ

「ふふ、まずは身体をきちんと洗ってからでしょ？」

アルタイル

「えへへ、ごめんごめん。

ここの風呂大きいからさ。ついテンション上がっちゃって」

ベガ

「そういうところは全然変わっていませんね」

アルタイル

「ベガもだよ？　そういう大人っぽいとこ……愛してるっ」

ベガ

「もう、無邪気なんだか大人なんだか……」

ベガ

「……ほら、座って？　シャワーしてあげる」

アルタイル

「やったっ。ベガに洗ってもらうの好きなんだっ」

ベガ

「ふふふ。

……お湯、出しますよ」

ベガ

「湯加減はいかが？　熱くないかしら？」

アルタイル

「うん……ぜーんぜんへいきー……」

ベガ

「あらあら、すっかり脱力ですね。

じゃあ、まずはシャンプーから……」

ベガ

「痛かったりしたら、ちゃんと言うのよ？」

アルタイル

「はい」

ベガ

「ごし……ごし……ごし、ごし……」

アルタイル

「ふふ……えへへ……ねえ、ベガ気づいてる？
いつもシャンプーするとき、ごしごしって言うの」

ベガ

「……へ、変ですか？」

アルタイル

「ううん、可愛いなーって」

ベガ

「もう、文句ばかり言う子にはこうしちゃいますよ」

アルタイル

「きゃっ……頭、ぐりぐりしちゃダメ～……あうう～……
マッサージみたいで、きもち～……」

ベガ

「ふふ、単純なんですから……んあっ」

アルタイル

「あ、ごめ……！
肘……お、おっぱいに当たっちゃった……」

ベガ

「……い、いえ。わたしこそ、変な声出ちゃいました……」

(同時)

ベガ

「……っ」

アルタイル

「……っ」

アルタイル

「……………あ、あのさ。
えへへ、ムラムラしてきたかも」

ベガ

「も、もう……男の子みたいなこと、
言わないでください……」

アルタイル

「えー……だって、今のはズルいよっ。
ねーね、選手交代、今度はボクに洗わせて？」

ベガ

「……今度は何を企んでるんですか？」

アルタイル

「んふふ……きっと喜んでくれると思うなっ」

アルタイル

「えーっと、ボディソープは……これかっ」

アルタイル

「泡立てて……ごし、ごしと」

ベガ

「もう、マネっ子して……」

アルタイル

「えへへ、じゃーん。
全身泡まみれのボク、誕生～」

ベガ

「ちょっと、どうするつもりです？」

アルタイル

「このままボクが、スポンジになって……
ベガのこと、洗っちゃうよっ」

ベガ

「へ……？」

アルタイル

「じゃあ、まずは……背中からっ」

ベガ

「ひゃっ……お、おっぱい……当たってますけど？」

アルタイル

「おっぱいスポンジってことでよろしくっ。
いくよー……んしょ……ん、しょ……」

(おっぱいスポンジで擦る音(泡を捏ねるみたいな柔らかめの音))

ベガ

「は……う……んんっ……背中に、やわらかいのが……
行ったり、来たりして……ん……変な、感じですね……」

アルタイル

「ん……う……ボクも……乳首、こすれて……
ちょっと……気持ちいい、かも……ふ、んんっ……」

ベガ

「もう……洗うのが、目的じゃなくて……？」

アルタイル

「えへへ……ん、しょ……ん、しょ……

はあ……ベガのお肌って、すべすべで、キレイだね……」

アルタイル

「これ……全部ボクのなんだったって、自慢したいな……」

ベガ

「人様に見せるようなものじゃありません……

あなたが独り占めするんでしょう……？」

アルタイル

「えへへ……そうだった……

次……腕……行くね……ん、しょ……」

ベガ

「んう……また、おっぱいで挟み込んだりして……

ことごとくエッチです……」

アルタイル

「えへへ……実はさっき、ベッドの上で……

これやりたいなって思ってたんだ……」

アルタイル

「じゃあ、ごしごしするね……ん、しょ……うん、しょ……」

ベガ

「んう……くすぐったい、ですわ……

それに、アル……さっきから、顔が赤い……」

アルタイル

「えへへ……のぼせ、ちゃったかな……ん、しょ……ん、しょ……」

ベガ

「ちょ、ちょっと……さっきから、ち、乳首ばかり、当ててません……？」

だんだん、硬くなってきてますけど……」

アルタイル

「んっ……う……ご、ごめん……

ちょっと……今、なんか……だめ、かも……はあ……あっ……」

ベガ

「やん……耳元で、えっちな声、出さないで……んっ……

わたしまで、意識……してしまいます……」

アルタイル

「えっちなボク……いや……？」

ベガとお風呂入ってるだけで……シたくなっちゃうんだ……」

ベガ

「嬉しい、ですけど……

あなたが……疲れちゃわないか、心配で……」

アルタイル

「ボクなら、大丈夫……ふ、んんっ……

ほら……手、借りるね……ん、ふうっ……」

ベガ

「あっ、何、して……う、あ……指……おまんこの、中に……」

アルタイル

「えへへ、こういうの……壺洗い、って言うらしいよ……

ベガの指……おまんこで、キレイにして、あげる……」

ベガ

「もう……自分が気持ちよくなりたい、だけでしょう……？」

アルタイル

「あんっ……はあ……えへへ、でも……ベガ……

指、動かしてくれてる……ふう……んっ、あっ……」

ベガ

「経験がありませんから……

どんな風に触ってほしいか、教えてください……」

ベガ

「アルがしたいことは、わたしのしたいこと、ですから……」

アルタイル

「うれしい……じゃあ、ね……

人差し指と、中指を……いっしょに、いれて……」

ベガ

「こう、です……？」

アルタイル

「ふう……んんっ……そ、そう……あっ、そのまま

くいつて、軽く……曲げて……」

アルタイル

「おへその方……おまんこの、ざらざらしたとこ……

なでで、ほしいな……ボク……そこが、好きなんだ……」

ベガ

「そうなんですね。気持ちいいとこ、知れて嬉しいです……痛かったら、言ってください……」

アルタイル

「はあ……あ……すごっ……優しい……」

ベガの指……ボクのおまんこ、なでなでしてくれてるっ……」

アルタイル

「はああ……あ、んっ……でも、もっと強くして、いいよ……」

音、でちゃうくらい……ずぼずぽって……ほじくり、まわして……」

ベガ

「でも……」

アルタイル

「ベガになら……うんと、ヒドくされても、嬉しい……」

ベガ

「……っ！

ど、どうなっても、知りませんからね……」

アルタイル

「はああっ、あっ……そ、それっ、すごくいいよっ、

ベガ、上手……ボクの気持ちいいとこ、いっぱい擦られてるっ……！」

アルタイル

「はあ……あ、あうっ……指、気持ちいいっ……ベガの指……」

魔法みたい……腰、動いちゃう……んんん、あっ……」

ベガ

「いいですよ、好きにして。

あなたが満足するまで、付き合いますから」

アルタイル

「ほんとおっ、えへ、えへへっ……じゃあ、もっと激しく、動いちゃうっ……」

はああ……あ、あっ……んんっ、あうっ……」

アルタイル

「あ……やば、いかも……ピリピリ、くるっ……」

あ、う……イ、きそ……これ、きちゃう……ねえ、イっちゃいそうだよっ……」

ベガ

「イってください……わたしの指で……」

うんと、かき回してあげます……んんっ、また……中、キつくなって……」

アルタイル

「んうっ……身体、勝手に反応しちゃって……ふ、う……
もう、自分じゃ……どうにも……ん、んううっ……！」

アルタイル

「はううううううう……！！」

アルタイル

「は……ひ……はぁ……はっ……はっ……
また……イカされ、ちゃった……」

ベガ

「き、気持ちよかった……ですか？」

アルタイル

「うん、うん……！ もちろん、だよ……
ボク……ますますキミに、メロメロになっちゃったよっ」

ベガ

「きゃっ！」

アルタイル

「お礼……今度はボクの番っ」

ベガ

「あ、待って……わたしは、もう……さっきので十分っ……ひゃっ！」

アルタイル

「男の子みたいに、腰の上、乗って……
ベガのクリトリス……気持ちよくしてあげる、ね……」

ベガ

「はう……べ、別に……頼んで、ませんけど……ひぁぁあつ、
あ……ふ、んんんっ、あ……す、ごっ……んっ……」

アルタイル

「えへへ……でも、ベガのクリ……もう、
硬くなってる……勃起してるみたいに、なってるよ……」

ベガ

「ひゃあつ……恥ずかしい事、言わないでくださいっ……
わたし……そこまで、はしたなくなった覚えはっ……はぁあつ……！」

アルタイル

「気にしないでいいのに。ボクは大人なベガも、えっちなベガも大好きだよっ」

ベガ

「ほんと……ホント、ですかあ？」

アルタイル

「うん……だから、いっぱい気持ちよくなっちゃえ」

ベガ

「はあああつ、あつ、あつ……はうんっ、
クリ、気持ちいい、気持ちいいですうっ、アルにされるの、全部好きいつ」

ベガ

「あ、あうっ、もっと、強くして大丈夫っ……
自分でするとき、ぎゅって、強くしてます、からあ……はあ、あつ」

アルタイル

「やっぱり？
ベガのクリ、ちょっと大きいよねっ。いっぱい自分でシた証拠だ」

ベガ

「はあああ、いわ、ないでええっ……その通り、ですけどおっ……
クリオナ、好きなんですっ、だから今、とっても幸せっ……」

ベガ

「ああ、あつ……ふ、んんんっ……
下半身が、自分じゃない、みたい……ふわふわ、してきて……はあああつ」

アルタイル

「分かるよ、触られてると、なんか全部、幸せになっちゃうよねっ。
膝でクリ、ぐりぐりって、してあげるっ……」

ベガ

「ああああつ、強、あ、あうっ……机の角で、グリグリするのと、
全然、違いますっ……はああ、あつ、あううっ」

ベガ

「なんで……全部、分かっちゃうんですかっ。
嬉しい、嬉しい……嬉しいですうっ、してほしいこと、してもらえるのっ……」

ベガ

「あううっ、も……わたし、もう、だめ、ですうっ……
来るっ……きちゃ、うっ……はああ……あ、あつ……んんんっ」

アルタイル

「イっていいよっ、ボクにだけ
世界一可愛いイキ顔、見せてほしいな」

ベガ

「うんっ……見せる、見せますうっ、
アルだけに……わたしの、宇宙一、恥ずかしい、とこ……はあああつ」

ベガ

「イ、く……イク、イクっ、いっちゃ……あ、あっあっあっ」

ベガ

「いっぐ……うう……あ、ああああああああ……！！！」

ベガ

「あ……ひ……は……はっ……はあ……はあ……」

ベガ

「も……げん、かい……です……」

アルタイル

「だ、だね……なんか、くらくらしちゃったよ……」

ベガ

「あたり、まえです……」

お風呂でこんな……激しくしたら……のぼせるに、きまってます……」

アルタイル

「イヤだったかい……？」

ベガ

「いいえ……最高、でしたよ……」

アルタイル

「えへへ……だと思った……」

ベガ

「でも……しばらくは……動けそうに、ありませんね……」

アルタイル

「うん……もうちょっと、ごろんってしてよっか……」

アルタイル

「……へっくちゅんっ」

ベガ

「もう、子供なんだから。

ん……ほら、シャワーで洗い流したら、お湯で洗い流しますよ」

アルタイル

「えー、動けないんじゃないの？」

ベガ

「ふふ、いいから」

アルタイル

「はい」

トラック4「一つになって……」

位置: 正面5

ベガ

「……ふう。いいお湯でしたね」

アルタイル

「うん、ベガの可愛いところも見れたしっ」

ベガ

「もう……さっきからそればかりですね」

アルタイル

「だってだってー」

ベガ

「気持ちは分りますけど、いったん休憩にしましょう？
ほら、お部屋のお掃除もしないとですし」

アルタイル

「それもそっか……あ、そうだった」

アルタイル

「じゃーん、飴っ
休憩するなら、これ食べよう」

ベガ

「あら、用意がいいんですね。
あなたにしては珍しい……」

アルタイル

「えへへ、そりゃもう3年越しだもの。
ボクだって色々計画くらい立てるさ」

アルタイル

「それよりほら、食べてみて？
すごい美味しいんだよ」

ベガ

「それにしても……とっても不思議な色彩をしますわね」

アルタイル

「ふふっ、まあまあ……いいからいいから。はい、あーんしてあげる」

ベガ

「じゃあ、遠慮なく……あむ……」

位置: アルタイル、左②

位置: ベガ、右④

ベガ

「はむ……んちゅ……ん、ふ……れろ、れろ……れろお……」

ベガ

「ん……個性的な……味ですね……」

ベガ

「ちゅっ……ちゅう、ちゅう……ちゅう、れろ、れろ……」

ベガ

「……でも、おいひいれふ……
くせになる味……ん……ちゅ……」

ベガ

「んちゅ、れろ……んちゅう、ちゅう、れろ、れろ、ちゅう、んちゅう……」

ベガ

「ん、う……ふ……あ、あれ……
何、かしら……体の芯が、急に、熱く……ねえ、これ、本当に飴？」

アルタイル

「うん、飴だよっ！」

ベガ

「あなたの、ことだから……また、何か……おかしな、ものを……
んちゅ……ちゅう……はむ、れろ……」

ベガ

「んんんっ……やっぱり、これ……おかしい、です……
さっきから……火照りが……疼きが、止まりません……」

ベガ

「それに……初めから、気になってたんです……この飴……
棒状で……卑猥な、形……して……あつ……」

アルタイル

「えへへ、分かる？
この飴、実はすごい強力な媚薬が入ってるんだ」

ベガ

「やっぱり……もう、お返しですっ」

アルタイル

「んひゃっ……ふう、ん……んちゅ……れろ……
えへへ……ベガの唾液の味、する……甘いのと混じって、おいひい……」

アルタイル

「ちゅっ、ちゅう、ちゅう、ちゅう、れろ……んちゅう、ちゅう、ちゅう……」

アルタイル

「なんか……ベガのおちんちん、なめてみたい……
変な、感じ……はむ、ちゅうう……れろ、れろお……はむっ……」

ベガ

「わ、わたしにそんなものは生えてませんっ」

アルタイル

「えへへ……それくらい、好きな味ってこと……
ちゅう……んちゅ、ちゅるっ……はむ……ちゅううう……」

ベガ

「変なこと言うお口は、こうして……ふさいじゃいますよ」

アルタイル

「んぐ……んんっ、それ……いい、かも……
ベガの飴……フェアしちゃうね……んちゅ……ちゅううう……ちゅるる……」

アルタイル

「んちゅ、んちゅ、れろ、れろ、れろ、んちゅう
……んちゅう、れろ、ちゅう、ちゅう……」

アルタイル

「んん……くひのなかへ、いっぱい、とけてりゅ……」

アルタイル

「れろ、ちゅう、ちゅう、れろ、れろ、ちゅう……んちゅう……」

アルタイル

「ん、ぷは……このままじゃ、とけて、なくなっちゃう……ベガのために、
買ったのに……」

アルタイル

「えっちな飴……お口の中で、どろどろになって……ごっくんしちゃいそう……」

アルタイル

「ん……んじゅるっ、んじゅっ、んじゅっ……」

アルタイル

「んじゅっ、んじゅっ、んじゅっ、んじゅっ……んじゅっ、んじゅっ、んじゅっ、んじゅっ、んじゅっ、ん
じゅ……っ」

ベガ

「も、もう……なんてエッチに舐めるんですか……」

はあ……あ……わたし、まで……なんだか……んっ……」

ベガ

「ね、ねえ……一緒に、なめてもいいですか……？」

アルタイル

「うん、もひろん……いっしょに、かたくておっきいあめ……
ぺろぺろ、しちやお……？」

ベガ

「はむ……ちゅ……ちゅうう……ちゅるる……」

アルタイル

「れろ……れろ……はむ……ボクは、下の方、なめるから……」

ベガ

「ええ、わたしが……先端の、方を、くわえて……はむっ、

んじゅ……んじゅ、じゅる……じゅる……」

アルタイル

「れろ、れろお……れろ……んちゅ、ちゅううう……」

ベガ

「じゅぱ……っ、じゅぱっ、じゅぱっ、じゅぱっ、じゅぱっ、じゅぱっ、
ん、ふ……ああん、溶けてなくなっちゃう……ん、じゅぷ、じゅぷっ……」

アルタイル

「んじゅるっ、んぐっ、んぐっ、んちゅ……
もっと、なめてたいのに……」

ベガ

「じゅる、んじゅ、じゅるるる、じゅぽ、じゅぽ、じゅぽ、じゅぽ……」

アルタイル

「んじゅるっ……れろ、れろ……ちゅううう、ちゅ、ちゅうっ、れろ、れろお……」

ベガ

「あ……とけちやい、ました……」

アルタイル

「大丈夫……おくち、あけて……？」

(同時)

ベガ

「んちゅ……ちゅうう……ん、れろ、れろ……」

アルタイル

「んちゅ……ちゅうう……ん、れろ、れろ……」

アルタイル

「ぷは……えへへ、最後のおすそわけ」

アルタイル

「どう……媚薬入りの飴、気に入ってもらえたかな？」

ベガ

「ふふっ……とつても……

まんまとしてやられてしまいましたね……」

ベガ

「これじゃ、お掃除どころじゃありませんよ……」

アルタイル

「ねえねえ、じゃあ……貝合わせっていうの、やりたいんだけど……」

アルタイル

「女の子同士で……おまんこ、こすり合わせるの」

ベガ

「それ……ほんとに、セ、セックス……みたいですね」

アルタイル

「そうだよ……女の子同士でしかできない、優しくて、甘くて……
とろとろなセックスだよ……？　ね、いいよね？」

ベガ

「わたしが断るとでも？

ふふ……リード、してくれるんでしょう？」

アルタイル

「えへへ、じゃあ、足……開いて」

ベガ

「ん……う、あんまり、マジマジ見ないでくださいます？」

アルタイル

「ううん、見る……だって、すごいキレイでエッチだから……」

アルタイル

「ベガのおまんこ……ボクので、もっと、気持ちよくして、あげるね……」

ベガ

「はう……んんっ、あなたの……もう、濡れてる……」

アルタイル

「ベガのだって……もう、ぐちゅぐちゅ……」

どっちのか、分からないよ……じゃあ、動くね……？」

ベガ

「はう……んっ、んんんっ、あっ……
つな、がってる……アルの……お、おまんこと……」

アルタイル

「うん……ベガの、とろとろ……熱いの……
伝わって、くるっ……はあ……あっ……」

ベガ

「わたしも……うごいて、いいですかっ……
はあ……あ、アルにも、きもちよくなって、ほしいから……」

アルタイル

「うんっ……いっしょに、したら……
何倍も、気持ちよくなっちゃうよっ……」

ベガ

「はあああっ、あっ……あうっ、わたしの……
お豆……クリ、デカクリが……アルのに、ひっかかって……あああんっ」

アルタイル

「あうっ、ベガがそんなえっちな言葉言うの、反則うっ……
耳に響く……ああっ、なんか……えっちいよおっ……」

ベガ

「飴の、せいでしょうかっ……なんだか、歯止めが……はああっ、
クリ同士、こりこりするの、すごくいいですっ……」

アルタイル

「うんっ、うんっ、ベガの勃起クリ、硬くて気持ちいいっ……
ボクのじゃ役不足かもだけど……いっぱい、ぐりぐり、しちゃうねっ……」

ベガ

「はああんっ、そんな、ことっ、あなたにされるのが、一番気持ちいいですっ、
わたしはもう……オナニーじゃ、物足りない身体に、されてしまいましたあっ……」

アルタイル

「ボクもだよおっ、ずっと、キミとこうしていたいっ、
キミを可愛く鳴かせたいんだっ」

ベガ

「あ……あああっ、やっ、激し、すぎっ、
わたしが……うまく、うごけな……はあああ、あああっ！」

アルタイル

「ごめんね、ごめんねっ、一緒がいいかもだけどっ、

ボクも、抑えられなくてっ、気持ちいいのが、とまんないよおっ」

ベガ

「あうっ、さっきから、ぐちゃぐちゃ、おまんこから……卑猥な、音……
これ、全部……わたしたちから、分泌されてるんですねっ……」

アルタイル

「そうだよおっ、えっちしたくて、おまんこが唾液、垂らしちゃってるのっ」

ベガ

「シーツ、汚れちゃいますっ……はあああつ、
これ以上したら、ボタボタ、垂れちゃう……あ、あああつ」

アルタイル

「そんなのもう、関係ないよっ。
はむ……ちゅ……ちゅううう……ちゅるるるるっ」

ベガ

「あ、待って、その位置……服の上から、見えちゃうっ……
キスマーク、ダメですうっ……はあ、あああつ……！」

アルタイル

「ダメなんかじゃないでしょっ、だってボクたち、恋人だものっ。
二人はついに結ばれたんだって、皆に教えてあげよっ」

ベガ

「ああ……はあっ……あ、なら……わたしもお……
わたしにも、させて、くださいい……」

アルタイル

「いいよっ……いっぱい、目立つところに……首でも、
胸のどこ、でも……」

ベガ

「なら……はむ、ちゅうう」

アルタイル

「ひゃっ……そこ、乳首……あ、あああつ」

ベガ

「ぷは……あなたが、私以外の人の前で脱がないようっ……恥ずかしいところに……
噛み跡……つけて、しまいます……」

アルタイル

「そんなこと、するわけ……あ、あああつ、んっ、
キミって、嫉妬深いんだねっ……」

ベガ

「知らなかったんですかっ……？
それにあなた、結構男女問わずモテるみたいですし……」

アルタイル
「知らないよ、君だけを一生、愛してるから……！」

ベガ
「はううっ、ズルい、ですうっ……
今の、反則……おまんこ、きゅんきゅん……きてるっ、んんっ」

アルタイル
「あううっ、スゴいよ、熱いの、ドロドロ出てきたっ……」

ベガ
「あう、わたし、もう……無理、限界、ですうっ……
ねえ、一緒に……独りに、しないでくださいっ……」

アルタイル
「分かってる、ずっと、ずっと一緒だからあつ」

ベガ
「イ、く……イク、イ、くっ、
あっ、あっ……ん、んんっ……！」

アルタイル
「ボ、ボクも……はう、来る、来ちゃうっ、あ、ああっ！
あんっ、あっ、あっ、あっ！」

(同時)
ベガ
「はああああああああああ……！！」
アルタイル
「あうううううううう……！！」

ベガ
「はああああ……あ……はああああ……」

アルタイル
「あうう……んんっ……」

ベガ
「はああ……はっ……はひ……」

アルタイル
「はああ……気持ちよかったね……ベガ……」

ベガ
「う……あ……」

アルタイル
「ベガ？」

ベガ
「あ……ご、ごめんなさい……
今……意識がちょっと……飛んでた、みたいで……んんっ……」

ベガ
「息……するたび……おなかが……
痙攣……しちやって……んんっ……あう……」

アルタイル
「……えへへ。
ベガのこと、失神させるくらい、イかせたってことだよね」

ベガ
「……そうみたい、です……
そんなに、うれしいですか？」

アルタイル
「なんか……ベガがそうなっちゃうくらい、
ボクに全部ゆだねてくれたのが、嬉しくて」

ベガ
「ふふ……次はあなたの番ですよ」

アルタイル
「えー？ ボクはどうかな？」

ベガ
「もう……アルったら」

アルタイル
「さすがに、少し疲れたでしょ？
休んでいいよ」

ベガ
「ふふ……勝手なんだから。じゃあ、お言葉に甘えて」

アルタイル
「ちゅ……おやすみ」

トラック5「もっと一つになりましょう……」

ベガ

「ん……う……アル？」

アルタイル

「おはよう、もう大丈夫？」

ベガ

「ええ、おかげさまで……

あれ、部屋がキレイになってますね。あなたが？」

アルタイル

「もちろん、お姫様を起こさないようにそっとねっ」

ベガ

「あらあら、いつから王子様に？」

アルタイル

「初めて出会った時からかな」

ベガ

「ふふ、ずいぶん口が達者な王子様ですね」

ベガ

「……それで、その手に持ってるのは？」

アルタイル

「あ……えっと……バイブかな」

ベガ

「ふ……ふふ、正直ですね。

それでわたしのこと、どうにかしちゃうつもりだったのかしら？」

アルタイル

「えへへ、これ双頭のやつだから、二人とも気持ちよくなれるんだ。

一緒にどうにかなっちゃおうかなって」

アルタイル

「……寝てるキミ見てたら、なんか辛抱ならなくなっちゃって」

ベガ

「ふふ、あんなにしたのに……」

アルタイル

「むしろ……すればするほど、かな」

ベガ

「なら、シャワー浴びてこないとかしら」

アルタイル

「あ、待って。そのままでいいよ」

ベガ

「ちょ、ちょっと……変態っぽいですよ」

アルタイル

「そうなのかも……」

キミの身体なら、どんな状態でも、汚くないっていうか……」

アルタイル

「むしろ、全部味わいたい……みたいな？」

ベガ

「……好きにしてください」

アルタイル

「えへへ……足、広げるね。」

ん……しょ、まずは……この、アロマオイルを……塗り、塗り……」

ベガ

「あ……やっ、待って、バイブ以外にも、隠し持ってたんですね……」

はあっ……あ……」

アルタイル

「うん、せっかくなら色々楽しもうと思って。」

……お次は、太ももから、足の付け根まで……塗り、塗り……」

ベガ

「う……あ……は……んんっ、もう……えっち、なんだから……」

アルタイル

「誉め言葉、だと思っておくね……」

えへへ……最後は、おまんこに……塗り、塗り……」

ベガ

「はあ……あ……んんんっ……なんです、今度は……」

塗ったところが……熱く、火照って……」

アルタイル

「さっきの飴と同じ……これも、媚薬入りのアロマオイル、だって……」

ベガ

「あう……ん、んうっ……ムズムズします……」

アルタイル

「ふー……ふー……」

ベガ

「あんっ、お、おまんこ……ふーふーしちゃ、ダメです……！
んんんっ……ね、ねえ……早く、してください、よ……」

アルタイル

「ごめんごめん……はむ、ん……じゅうう……」

ベガ

「ああ……き、たあっ……アルの……長い、舌……
はああ……素敵、ですっ……」

アルタイル

「じゅるっ、じゅるっ、じゅるっ、じゅるじゅる、じゅっ、じゅぶっ、じゅる、じゅるっ……」

ベガ

「もう……すっかり、気持ちいいとこ、覚え込んで……
わたしなんかよりも……わたしのこと、よく知ってますうっ……」

アルタイル

「んじゅる……じゅぶっ、じゅぶっ……んじゅっ、んじゅっ、んじゅううう……」

アルタイル

「じゃあ、こういうのはどう？ 指に……オイル、からめて……」

ベガ

「んひゃっ、ま、まって……そっちは、お尻の穴……
指なんか、入れちゃ……ん、んうっ」

アルタイル

「ベガに汚いとこなんてないって言ったよね。
これから、いっぱい気持ちいいことお勉強しようね」

ベガ

「はああっ、あ……おまんこと、お尻……両方、なんてえっ……
あ、あうっ……はあ……！」

アルタイル

「じゅっうう……んじゅるっ、じゅるっ、じゅぶっ、じゅっ、じゅう、じゅるるっじゅっ、じゅるる……」

ベガ

「う……あ、あうっ、お尻のなか、ほじほじ、だめえっ……
はあ……引き抜くとき、変な、感じ……あ、あああうっ……！！」

アルタイル

「んっ、ちゅっ、ちゅ…じゅるっ、じゅうううううっ。
んじゅう……んじゅう、んじゅるるるるっ」

ベガ

「あう……も、だめ……おしりと、おまんこ、きもちいい……あ、ああつ、
やだ……こんな……こんな、変態なのっ……」

アルタイル

「れろっ、んっ、れろ、れろ、れろお……ちゅるっ、ちゅうう…
んちゅっ、ちゅっ、じゅうう、じゅる……」

ベガ

「くやしいけど……アルの触ってくところ、
全部……気持ちいいですうっ……お尻、お尻の中、熱いっ……」

アルタイル

「あ、お尻の穴、きゅってなった……
いきそうなんだ、イって。イっていいよ。ボクが見てあげる」

アルタイル

「じゅるっ、じゅるっ、じゅるるっ、んじゅっ、じゅうう……」

ベガ

「う……あ、ああつ、い……く、イク、お尻で、いつちゃ、あつ、
イク、イクいくっ……！」

ベガ

「んんんんんんっ……！！！」

アルタイル

「わっ……お尻、ぎゅってなった……
すっごい、キツキツ……指、かじられちゃったみたい……ん、しょ……」

ベガ

「あ、まって……今、抜かないで……はあ……あ、んぐううっ……！！！」

アルタイル

「抜くときが、一番気持ちいいっていうもんね。
またいつちゃったかい？」

ベガ

「はあああ……はあ……は……はあ……はひ……
あなた、分かっててやったん、ですね……」

アルタイル

「えへへ、つい」

ベガ

「もう……あなたなんか、こうですっ」

アルタイル

「うひゃっ！？ まま、待ってっ！

お尻の穴、なめるのは……さすがに……ん、んうっ、舌、入って……んひっ」

ベガ

「気持ちいいことは、全部いっしょに……

あなたのことも、お尻でイかせてあげますから……！」

ベガ

「じゅるる、じゅるう、じゅるじゅるっ……じゅぶっ、じゅぶっ、じゅるっ、んじゅる……じゅるる……」

アルタイル

「はううっ……あ、ああっ……う、うんち……するとこ、なのにつ……ベガの、舌が……中で……うあ……なんか、ヤバい、ヤバいよ、これえっ……」

ベガ

「ん……んちゅう……んちゅう、ちゅう、ちゅう、んちゅう……」

ベガ

「お尻だけだと思って……油断しないで、くださいね」

アルタイル

「はううっ、クリ、きもちっ……お尻、ペロペロされながら……

クリ、いじめられるの……いい、いいよおっ……はああ、あ、あうっ！」

ベガ

「んちゅるる、んちゅる、んちゅる、ちゅう、ちゅう、れろ……」

アルタイル

「ひああっ、知ってるっ？ お尻のこと、

ケツマンコって、言うんだって……これ、確かにそうかもっ」

アルタイル

「おまんこみたいに、気持ちいいよっ……

両方の穴、ほじほじされたら……バカに、なっちゃううっ！」

ベガ

「なら……もっと、バカにしちゃいます……

あなたばかり、ズルいですから」

ベガ

「ん……ちゅう、んちゅう、んちゅう、んちゅる、

んちゅる、んちゅる、んちゅる、れろ、れろ……」

アルタイル

「ああん、あっ、あうっ……好き、両方好き、ケツマンコ、すきいっ、もっと、もってえっ！」

ベガ

「んちゅ、れろ、ちゅぷぷっ、んちゅるっ、ちゅぷっ……ちゅるっ、れろ、れろ、れろお……」

アルタイル

「こんなはしたない女の子でも、嫌いにならないっ？
ずっと一生、愛してくれるっ？」

ベガ

「あたりまえれふ……ケツマンコで喘いでるアルも、宇宙一可愛いですよ」

アルタイル

「はううっ、幸せ……すっごく、満たされる……
きゅんきゅん、くるっ……あ、ああっ……あふううっ！」

ベガ

「んじゅっ、ちゅうっ、ちゅるるう……じゅるるる……ちゅば……」

アルタイル

「くる……き、ちゃうっ……ボクも……イクっ、イっちゃ……あ、ああっ！」

ベガ

「大丈夫ですよ。一緒ですから。安心して、気持ちよくなって」

ベガ

「じゅっ、じゅっ、んじゅる……じゅるっ、じゅうるっ、はあ……んじゅっ、んじゅるっ、じゅる、じゅる
るっ、じゅるじゅるっ……」

アルタイル

「くる……きちや、あっ、あ、あああっ！
あっ……んっ！」

アルタイル

「あはああああああ……！！！」

ベガ

「ふぐっ……ん、ぷはっ……
すごい、ですわ……アルのなか、ヒクついて、激しくうねるみたいに……」

アルタイル

「はああ……は……はああ……
だ、だって……キミが予想以上に、テクニシャンなんだもの……」

ベガ

「まあ。これでも初めてですよ？」

アルタイル

「はあ……あ……ふ……
じゃあ……ボクたち……相性ぴったりってことかな……」

ベガ

「お尻で決めるのもどうかと思いますけど」

アルタイル

「大丈夫だよ。ボクに至っては、
おまんこより先に、お尻の処女失ったみたいなものだからさ」

ベガ

「ふ……ふふ……何それ……」

アルタイル

「ふふふ……えへへ……」

アルタイル

「ね……キスしていい？」

ベガ

「いいんですか？」

アルタイル

「汚いところなんてないから」

ベガ

「……はい」

(同時)

ベガ

「んちゅ……ちゅうう……ちゅ、ちゅぱ……」

アルタイル

「んちゅ……ちゅ……ちゅう……ちゅふ……」

(同時)

アルタイル

「ふは……はあ……はあ……」

ベガ

「ふは……はあ……はあ……」

アルタイル

「じゃあ……パイプ……入れる、ね……？」

ベガ

「はい……一緒にタイミングで、お願いします……」

アルタイル

「んっ、んんっ…あっ、くう……んんうっ」

ベガ

「はあ……はあ……大きくて……入れるの、大変、ですね……」

アルタイル

「でも……あと……もうちょっとで……根元まで…んっ、んう…あっ、ん……」

(同時)

ベガ

「はうううううう……」

アルタイル

「んんううううう……」

アルタイル

「はあ……はあ……だ……大丈夫？ ベガ……」

ベガ

「ん……うう……アルこそ……痛く、ないですか……」

アルタイル

「ううん……思ったより……あ、やっぱ、ちょっとだけ、苦しいけど……けど……」

ベガ

「やっぱり……アルも、ですか……」

アルタイル

「つながってるのが……嬉しくて……」

ベガ

「ええ……本当に……ひとつに、なれたみたいで……」

アルタイル

「動いて……いい……？」

ベガ

「もちろんです……わたしも、一緒に……」

アルタイル

「んっ、ああ……、あっ、ああっ！

ぱんぱんって、打ち付けあうの……すごく、えっちだね……」

ベガ

「はいっ……アルを犯しながら……

犯されてる、みたいで……興奮、してしまいますっ……はああっ」

ベガ

「んっ、んんう……ふあ、あっ、ああっ……あんっ、ああんっ……！」

アルタイル

「あう……ベガのこと、もっと気遣いたいけど……無理、かもおつ……
なんか……自分で、いっぱいいっぱいだよおつ……！」

アルタイル

「んっ、ふぁ、あああっ！ んんっ、んんう、あっ、ああ、あああっ！」

ベガ

「わたし、も……あなたを、支えたいけどっ……
気持ちいいのが、頭に響いて……真っ白に、なっちゃいますうっ……！」

アルタイル

「好き、好きだよベガ、大好き、大好きいつ」

ベガ

「好きい…大好きい…アル、大好きですう… ずっと、一緒ですうっ……！」

アルタイル

「当たり前だよっ、世界で一番、大好きだからあっ！」

ベガ

「わたしも、ですうっ、もっとアルのこと、おまんこの奥で感じさせて、くださいっ……！」

アルタイル

「ボクも……ベガのことが、いっぱいほしい……ベガの、全部、滅茶苦茶にしちゃいたいよおつ
……！」

ベガ

「ひゃっ！ ふぁ、あっ、あんっ！ 急に、激しくするなんてえっ……！」

ベガ

「わたしの……おまんこ、壊れちゃい、ますうっ……はああ、あ、ああっ！」

アルタイル

「ごめんね、なんかもう、イっちゃいそうでっ！ 腰、とまんないのっ！
はああっ、あ、ああっ……あ、あ、ああっ！」

ベガ

「うれしい、わたしも、ですうっ……！
本当に、何から何まで、相性、ぴったりで……幸せ、ものですうっ……！」

ベガ

「あっ、あっ、あっ、ああん…！ もう、わたしのおまんこも……
ダメに、なっちゃいますうっ……はああ、あっ！」

アルタイル

「イって、一緒にイこう？ んっ、あつ、ああつ、んああ...！」

ベガ

「はいっ.....ふたりで、アルと.....幸せに.....はああ、あつ、ああっ！」

ベガ

「わたしのこと.....滅茶苦茶にして、いいからあつ！ ああっ！」

ベガ

「あつ、やっ、やあん！ あ、あ、すごっ！ 深くてっ！ あふっ！
窒息しちゃいそうなくらいっ、気持ちいいですうっ！」

アルタイル

「ふあ、あああつ、あ、つく、うう...やあ、ああんっ！」

アルタイル

「ボクも、下半身、びりびりで、わかんないっ！
自分が、なにしてるかつ、あ、ああつ、きもち、きもちいいよおっ！」

アルタイル

「つながってるの、きもちいいっ！
いっしょ、ずっと、いっしょにいっ！」

(同時)

ベガ

「ああつ、あんっ、あつ、ああっ！ イクっ、イクイクっ...！」

アルタイル

「ああつ、あんっ、あつ、ああっ！ くるっ、きちゃうっ...！」

(同時)

ベガ

「イっ、クううううううううううううう！」

アルタイル

「イっ、クううううううううううううう！」

ベガ

「はああああ.....あ.....ふ.....んんっ.....」

アルタイル

「うあ.....あ.....あうっ.....はああ.....」

ベガ

「はああ.....はあ.....は.....」

アルタイル

「はああ.....は.....ひ.....」

アルタイル

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ベガ

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ベガ

「……ねえ」

アルタイル

「……なあに？」

ベガ

「愛してます」

アルタイル

「……どうしたの」

ベガ

「この言い方は、まだしてなかった気がする」

アルタイル

「えへ……えへへへ」

アルタイル

「色んな好き、埋めてくれるんだ」

アルタイル

「じゃあボクも……」

アルタイル

「ちゅ……」

ベガ

「ん……キスはさっきからしてるでしょう？」

アルタイル

「これくらいじゃ、ボクの愛は伝わらないよ」

ベガ

「あら、わたしの愛も、こんなものだと思ってますか？」

アルタイル

「ふふ……」

ベガ

「ふふ……」

アルタイル
「……ねえ」

ベガ
「……もう一回、してもいいかしら？」

アルタイル
「え、え……ベガから誘ってくれるの？」

ベガ
「……やっぱり取り消そうかしら」

アルタイル
「だーめ、今夜は、寝かせないぞー、なんて」

ベガ
「あん……もう、エッチなんだから……はぁあつ……」

トラック6「エピローグ」

アルタイル
「……ふう。ベッドはこんなもんでいいかな？」

ベガ
「散々汚しつくしてしまいましたからね。
……うん、匂いもしませんわ」

アルタイル

「あーあ、これでまた、1年会えないのかあ」

ベガ

「ふふ、わたしたちのような不死の身にとって、
1年なんてあっという間ですよ？」

アルタイル

「それでも、だよ」

アルタイル

「ボクは365日、永遠にキミといたいよ」

ベガ

「それは……わたしもですけど」

アルタイル

「ごめんごめん、困らせちゃった」

アルタイル

「昔はともかく、今は年に一回しか会えないっていう、
そんな星のもとに生まれたことも、恨んでないよ」

ベガ

「そうなの？」

アルタイル

「だって、こうじゃないボクたちって、
ボクたちって言えるのかな」

ベガ

「ふ……ふふ、哲学的なようで、
あなたらしい、感性によった答えだと思います」

アルタイル

「それって……褒めてる？」

ベガ

「ええ。わたしも同意見ですし」

ベガ

「会えない日々が……愛を深くする、なんていいですし」

アルタイル

「あーん、それでもやっぱりさみしいよー！」

ベガ

「……もう、別れがつらくなりますよ？」

アルタイル

「……ごめんごめん」

アルタイル

「そうだね、ボクたちは晴れて結ばれたわけだし」

アルタイル

「最後はいつもらしく、明るく元気よく、さよならしよっか」

ベガ

「ええ……では」

アルタイル

「うん……それじゃ」

(同時)

ベガ

「ちゅ……」

アルタイル

「ちゅ……」

(同時)

ベガ

「また来年」

アルタイル

「また来年」

(同時)

ベガ

「愛しています、アル」

アルタイル

「愛してるよ、ベガ」